

## 第35回

### ユニット玄関

近畿大学 建築学部  
准教授 山口 健太郎



#### 【経歴】

京都大学大学院を卒業後、株式会社メトス、国立保健医療科学院協力研究員を経て2008年より近畿大学理工学部建築学科講師。2011年4月より現職。

特別養護老人ホームや小規模多機能型居宅介護などの研究を行うかたわら、高齢者施設の設計にも関わる。主な建物に「ケアタウンたちばな、設計監修、大牟田市」などがある。

建物の設計において玄関は一つの見せ場である。道路から敷地内に入り、そしてドアを開け最初に見える内部空間が玄関となる。一般的に玄関は広く優雅であるほど格式が高い。土足部分の石材や上り框部分の床材には、こだわりを持ち、花や書画により客をもてなす。狭小な空間の中に粋と贅を詰め込んだのが玄関となる。また、靴を脱ぐ文化である我が国において玄関は、ウチとソトを分ける境界・結界としての機能をもつ。きれいな空間と汚れた空間、公と私との切り分けが玄関にて行われる。玄関には物理的な境界としてだけでなく、心理的な境界としての機能もある。さらに、玄関では立ち話や買い物（行商など）などの行為も行われる。公の場の井戸端会議ではできないヒソヒソ話が展開され、移動空間だけではない滞在場所としての役割がある。

このように玄関には、象徴性、領域性、場所性という機能が埋め込まれており、住宅の中でも重要な空間となる。ユニット型施設においても玄関の重要性が指摘されており、「ユニット玄関」を設けることが推奨されている。ユニット玄関とは、ユニットごとに設けられた玄関であり、大規模な施設になると施設全体の玄関を通った先にユニット玄関がある。住宅の玄関は一つであるが、ユニット型施設においては複数の玄関があり、それらが重層的につながっている。外部と直接つながっていないユニット玄関もあり、一般的な玄関の持つ機能性がどのように反映されているかは不明である。そこで上記の3つの機能からユニット玄関について考えてみたい。

①象徴性：玄関には、そこに住まう人々を選別する関所としての機能があり、選ばれた（許可された）という意識が、居住者間（家族）のつながりを強める。玄関の意匠は、集団の共通意識や他者との違いを表す目印であり、ユニット玄

.....

関においても生活を共にする集団としての一体感を入居者に与える効果がある。

②領域性：ユニット玄関にて履き替えを行った場合、入居者と家族は他ユニットに移動する機会が少ないため、ユニット外は外履き、ユニット内は上履きとしても支障がない。だが、職員の行動範囲は施設全体に及ぶため、各ユニット玄関にて履き替える仕組みを採用した場合、他ユニットに移動するときには外履きに履き替え、上履きを手で持つ必要が生じてくる。夜勤は2ユニットに1名であり、介護職員の忙しさも考えると、結果的には上履きのままユニット外の廊下を移動することになり、衛生と不衛生のゾーンが交差してしまう。高齢者施設では車いす利用者が多いなどの問題から床に直接座るユカ座はあまりみられないが、上履きと外履きが交差した衛生環境ではユカ座姿勢にはなりにくい。床や畳でゴロンと横になるというのが日本人のくつろぐ姿勢であり、そのためには靴を脱ぐ空間と、靴を履く空間の明確な領域分けが必要である。このように考えると施設における履き替え線は、屋外と屋内の境界線に設けるのがよく、ユニット玄関がある場合でも全員が施設全体の玄関で履き替える方がよい。

③場所性：認知症の症状による帰宅願望がある人にとって玄関は気分を落ち着かせる場となる。玄関脇のベンチに座り外を眺める。職員と一緒に散歩に出かけ玄関前のベンチで少し休憩する。外部環境とのつながりが気持ちを静め、不穏な行動を和らげる。この場所性は「屋外空間」との接続によりもたらされている。ゆえにユニット玄関が屋外に面していない場合には、玄関にイスなどを設けても、あまり利用されない。また、施設全体の玄関にイスなどを設ける場合もあるが、玄関自体が住宅的なスケールを超え、職員の見守りも容易でないことから、認知症高齢者の居場所にはなりにくい。

このように直接外部に面していないユニット玄関には、ユニットメンバーとして象徴性しかなく、領域性、場所性の効果は得られにくい。玄関としての機能を発揮するためには外部に接続している必要がある。大規模なユニット型施設ではすべてのユニット玄関を外部に面することは難しいが、2から4ユニット程度の小規模な施設であれば直接外部に通じることも可能である。ユニット玄関をモニュメントにしないためにも、小規模な施設を整備していくことが望ましい。